

「フランスの離島振興施策の紹介」 ーコルシカ島で再会、つながる幹部セミナーの縁ー

パリ事務所

今回は、フランスの離島振興施策についてご紹介いたします。2011年にクレアが実施し、私も同行させていただいた海外自治体幹部交流協力セミナー参加者のオリビエ・アンドレアーニさんからの招待を受け、コルシカ島に参りました。オリビエさんはアジャクシオ都市圏共同体¹の交通・バリアフリー局長として参加し、同セミナーで「歴史的建築物を生かした観光施策」をテーマとした奈良県の施策について、熱心に勉強されて帰国されましたが、その際、コルシカ島の観光もぜひ紹介したいということで、今回はフランスの離島振興



アジャクシオ位置図

施策を調査に参りました。もちろん、彼との再会も大変楽しみであったのですが、もう一つの動機として、フランスの離島振興（行政運営）が現場でどのようになされているかを自分の目で見たいというのがありました。

なお、コルシカ島は、離島であるという地理的な特殊性を踏まえ、地域の経済開発を促進することを目的として、租税総合法典 267 条により減税措置²がなされておりますが、フランスにおける現状が想像できず、現地に出向きました。

○限られた予算で着実に交通インフラ整備を

コルシカ島に行く手段としては、飛行機とフェリーが考えられます。そして、島内の都市間をつなぐ交通手段は、コルシカ鉄道³や民間の高速バスなどがありますが、本数が少ないため、レンタカーやタクシーで移動する人も多いようです。コルシカ鉄道は、単線で、フランス国土のレール幅と間隔が異なる(フランス本土採用の標準軌 1,435mm に対して、コルシカ鉄道は 1,000 mm) という特徴があります。また、特に鉄道は、地中海やマキ⁴の密生する山岳地帯の景観が楽しめるため、観光客に人気があります。そして、地域内の移

¹フランス・コルス島の南半分を占めるコルス＝デュ＝シュド県 (Corse-du-Sud) の県庁所在地アジャクシオを中心とする 10 のコミューンから成る広域行政体。

² フランスの離島における付加価値税の減免事例について参考リンク (クレアパリ)
<http://www.clairparis.org/img/pdf/research/research/2011/20110608ritougenmen.pdf>

³コルシカ島全域を管轄する地方行政機関であるコルス地方公共団体(Collectivité Territoriale de Corse)が運営を担っている

⁴地中海沿岸、特にコルシカ島の灌木密生地帯を指す。

動については、公営バスが大きな役割を担っています。

アジャクシオ滞在中に気がついたのは、公営バスにおける時刻の正確さでした。市内の移動にはバスを使うことが多かったのですが、便数こそ少ないもののほぼ正確に運行しており、また運転手も大変丁寧な対応でした。また、バスの車両は新しく、バス停も整備され、とても清潔な印象を持ちました。アジャクシオ都市圏共同体の交通・バリアフリー局長であるオリビエさんの話によると「サービスの視点から、運行時間にはとても気を付けている。便数を増やせばよいのだが、人件費の問題でなかなか難しい。そこで、現行の時刻表についてはできるだけ正確に守っていききたい。バス車両については、平均4年が経過しただけの若いバス達だ。新車は1台あたり30万€と、中古車の何倍もするが、ここ数年でなんとか更新してきた。バス停についても同様に更新し、住民アンケートからも高い評価を得ている。」とのことでした。



夜遅く運行するアジャクシオの公営バス

また、今年の秋より運用されるアジャクシオの新システムについて説明いただき、①バスにGPSを搭載し集中管理をすることで、利用者がバス停に掲示されているコードを携帯端末等で読み取り、バスの運行状況を把握できる、②システムを構築するにあたっては、欧州連合から約7割の補助を受けている、③空港から市内へのアプローチ対策として、月曜日から土曜日に20分間隔で空港から市内へのバスを走らせるという計画とのことでした。

オリビエさんが、「交通インフラの整備には多大な投資コストがかかる。なので、少しずつステップを踏みながら更新していくことが大切だ。」と話したことからも、限られた予算で可能な整備を着実に成し遂げてきたことが伺えます。

○コルシカ島の都市は玉虫色

コルシカ島の都市をいくつか訪問して感じたのは、各都市の持つ雰囲気異なるということです。例えば同じ港町でも、中部のアジャクシオと北部のバスティア⁵はその表情が異なります。アジャクシオは陽気で、商業的な賑やかさを感じる一方、バスティアはもう少し穏やかで庶民的な雰囲気を感じました。また、南端のポニファシオ⁶においては、イタリア領であるサルディニアがとても近いこともあり、イタリア文化の雰囲気をもさらに強く感じました。



コルシカ島内の地図

⁵ コルシカ島の北半分を占めるオート＝コルス県 (Haute-Corse) の県庁所在地で、県の北部に位置する。

⁶ コルシカ島の南側に位置し、イタリア領のサルデーニャ島とポニファシオ海峡を挟んで向かい合う形で位置する。

コルシカ島は、北部のバスティアを中心とするロマンス諸語文化圏、中部のアジャクシオを中心とするトスカナ語文化圏、南部のボニファシオを中心とするサルデーニャ語文化圏の3つに分かれていて、それが各々の都市形成に大きく影響しているとのことでした。

また、オリビエさんからも、コルシカ島を縦断している山脈をはさんで、文化や言語も異なるということを教わりました。コルシカ島の歩んできた歴史と、地理的な条件が、「コルシカ島の様々な顔」を形成してきたということを垣間見ることができた気がします。

○特産品と音楽はコルシカ島共通の財産

しかしながら、コルシカ島の共通事項も同時に見つけることができました。それは、コルシカ等の伝統芸術「ポリフォニー」(多声音楽)⁷のライブを告知するポスターの多さでした。また、夜のレストランやカフェにおいては、様々なジャンルのライブが行われ、まさに音楽のまちと化します。私も、ポリフォニーのライブを聞くことができ、その世界観に圧倒されました。演奏された曲の多くがコルシカ語でなされており、ポリフォニーが、口語による文化継承に重要な役割を担っていたことがわかりました。

コルシカ島のポリフォニーのうち、パディエツラ風の歌謡(Cantu in paghjella)は2009年ユネスコの世界無形遺産に登録され、世界的な見地からその普遍的価値が認められたことは記憶に新しいところです。世界無形遺産の登録においては、ポリフォニーの歌手が、その存続を目的に尽力をしたとのことでした。



至るところに張られているポスター

そして、どの都市においても、地ビールであるピエトラと、コルシカ島の特産品である豚の燻製が置いてあったことから、特産品と音楽については、どの都市にも共有された財産であり、この点についてはコルシカ島の一体感を確認することができました。

○コルシカナイフから学ぶこと

コルシカ島の産業は、観光産業やサービス業をメインとしています。特に、運輸従事者や公務関係者が多く⁸、第3次産業に勤務者が集中していると言えます。一方、小さいながらも伝統的な産業も存在しています。その一例として「コルシカナイフ」が挙げられます。

⁷ 多声音楽(多重音声)の意。コルシカ島のポリフォニーは、複数の歌手が音階の異なる声で音をずらしながら神秘的な響きを生み出す。教会や村の集会などで、口頭により継承されてきた。

⁸ 参考: INSEE① http://www.insee.fr/fr/themes/tableau.asp?reg_id=6&ref_id=ecotc08102
INSEE② http://www.insee.fr/fr/themes/tableau.asp?reg_id=6&ref_id=tratc03103

ちょうど滞在期間中に、コルシカナイフの展示会があるとのことでしたので、連れて行っていただきました。展示会では、多くのナイフが展示されており、来場者に対して職人達から直々に説明をしていました。写真にあるような「羊飼いのナイフ」と呼ばれるタイプが一番多く、これは 15cm 前後の比較的小ぶりなサイズで、折りたたみ式、柄の部分は木材や石材、羊の角などでできています。ハンドメイドで拵えられた細部にわたる装飾と時間をかけて鍛えられた刃渡りは、まるで美術品のような印象を受けました。その分、価格も決して安くなく、150 ユーロ前後のものから 1,000 ユーロ以上のものまでありました。来訪者からは、確かに展示されているものは逸品だが、(高価であることに對し) 需要に対する価格帯のバランスも大切だという感想も聞かれました。

課題としては、土産物として売っているナイフの大部分は、他国で作られた大量生産のものが多いとのことでした。それらとの差別化について、独自の認証制度はなく、ナイフに施された職人の名前と、確かな技術がその独自性を証明するものであるとのことでした。デモンストレーションにおいて行われたナイフの試し切りでは、分厚い辞書のような冊子が簡単に裁断されていました。



コルシカナイフの展示会の様子

カルヴィ⁹にある博物館では、顔写真入りで、革製品、山羊のチーズ、豚の燻製などを作る職人達を紹介するコーナーが設置されていました。コルシカ島の歴史を語る上で、職人達の軌跡と、現在まで根付いている伝統や文化を正しく発信するという取組はとても重要であると再認識する機会となりました。

○城郭の路地巡りーまちの魅せ方、歩かせ方ー

各都市には、観光協会 (Office du Tourisme) があり、パンフレットはもちろん、名所までの交流手段やコンサート情報など、様々な情報を得ることができました。初めてその地を訪れる観光客は、まずは観光協会を目指し、必要な情報を収集することからも、その役割は非常に重要です。また、対応いただいた窓口のスタッフはとても丁寧で、都市に対するイメージがとてもよ



城郭内にある路地の様子

⁹ コルシカ島の北西岸に位置しするコミューン。人口は約5千人。

く感じられました。

観光施策の中でも魅力的に感じたのは城郭（Citadelle）です。コルシカ島の城郭は、簡単に言うと外敵からの侵略や、内地からの反乱を防ぐために設けられた要塞です。城郭を歩いて感じたのは「路地」の魅力です。昔ながらの区画と路地をそのままの形で残しており、それらを巡ることにより、宝物を探すために迷路に入り込んだような感覚になります。観光客の中には、その細く少し曲がった路地を熱心に写真に収めている方もいました。リヨンから来たという観光客に話を聞いてみると、「住民の生活も含めた路地は、散策するにはとても魅力的だね。」とのことでした。また、都市によっては、有料で音声ガイド¹⁰の貸し出しを実施しており、個人で訪れた観光客が、通りや建築物を通して歴史を学べるようになっていました。この音声ガイドと、パンフレットがいわゆる「宝の地図」となり、散策をより充実させるツールとなっている訳です。日本の自治体においても、昔ながらの路地や区画が残っている都市は、それらを生かした都市計画や、景観保全が実施されていると思われます。例えば、外部からの観光客に「地域の宝探し」をしていただくような「遊び心」を施策の中に反映させるのも1つの方法かもしれません。

○コルシカ島と日本の交流促進を期待

今回の滞在では、コルシカ島の持つ独自性と多面的な魅力について、その一部を垣間見ることができました。コルシカ島は日本語の情報が限られていることから、それほど多くの日本人には詳細が知られておらず、今回の訪問でもあまり日本人の姿は見受けられませんでした。しかしながら、現地の方々と話すなかで、彼らの多くが非常に日本について好意的であることが分かりました。日本のマンガをよく知る若者や、寿司が大好きなホテル従業員、「日本の都市はモダンで好きだわ」と声をかけてくれたご婦人など、何人もの方々と友好的に話すことができました。また、沖縄県において音楽文化の交流が実施される等、コルシカ島と日本とはいくつかの接点があります。オリビエさんも、コルシカ島のことをもっと日本の皆様に知っていただき、観光に訪れていただくための仕掛けを考えたいと言っていました。

今後、地中海と山とを合わせ持つ恵まれた自然環境、独自の言語教育や民族音楽などの伝統文化をはじめ、多面的な魅力に溢れたコルシカ島が、より日本にとって身近な地域となり、日本や日本自治体との交流が今後発展することを期待してまとめたいと思います。次回の訪問時には、アジャクシオに新システムが稼働しているはずなので、それも楽しみの1つとしたいです。

(原田所長補佐 群馬県富岡市派遣)

¹⁰ ボニファシオの観光協会が借りた音声ガイドは、5ユーロで、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語が対応。また、貸出時にパスポート等本人確認ができる証明書を提出し、返却時に手元に戻ってくる。